

ラグビー日本代表の強化と方向性に関する研究 ～2007年ラグビーW杯の分析・問題点・改善案～

A study of how to improve the national rugby team of Japan
～From the analysis of world cup2007 and some solutions～

1K04B175-8

畠山 健介

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 吉永武史先生

序論

低迷するラグビー日本代表。第6回ラグビーワールドカップ(以下、ラグビーW杯)の日本代表の試合結果は4戦1分3敗で予選リーグ敗退となった。ラグビー日本代表はラグビー強豪国相手に勝つことは出来ないのであろうか。2007年W杯から見えてきた日本ラグビーの問題点を抽出し、その原因と改善のための方策について探っていこうとする。代表チームを強化し、ひいては日本ラグビー界全体の水準を上げるためには、現在どのような問題点があり、今後どのような方向性が求められているのかを、明らかにしていきたい。

第1章 ラグビーW杯2007フランス大会

2007年9月7日からフランスを中心にウェールズ、スコットランドにまたがって開催されたラグビーW杯2007フランス大会は10月20日(日本時間21日午前4時)パリ近郊のサン＝ドニで決勝を行い、史上初の大会2連覇の期待がかかったイングランドと95年の第3回大会覇者、南アフリカとが激突し、南アフリカが15対6でイングランドを下し、95年に優勝して以来となる、3大会ぶり2度目の栄冠を手にした。第6回ラグビーW杯決勝トーナメントの試合内容、日本代表の試合結果を検討した結果、体格で劣る日本人は体の大きい外国人に対し、彼らより早く筋持久力を消費してしまうことが明らかとなった。

第2章 ラグビー日本代表選手の問題点と強化の方向性

体格の優る相手と対戦する際に、筋持久力を維持するにはどうしたらよいのだろうか。この問題についてヒントになるのが、同じコンタクトスポーツであるアメリカンフットボールの日本代表は、W杯で上位に入っているという事実である。この違いは、アメフトが「断続的」なゲームであり、ラグビーが「継続的」なゲームであるからではないだろうか。ラグビーのなかで筋持久力の問題を解決するためには、筋持久力を浪費しない為のキックを主体とする戦術を研究すること、選手個人の力を向上させるアカデミー制度を作ることなどが必要であると思われる。

第3章 チームとしての強化とHC(ヘッドコーチ)の重要性について

第3章では、日本代表HCのあり方が、どうあるべきかについて検討した。前HC エリサルドとジョン・カーワンとを比較しながら検討した結果、フランス式の型を日本人選手にあてはめようとしたエリサルドは失敗し、日本人の適性にあったラグビーを追及しているカーワンは大きな成果を収めてことが明らかとなった。

しかし、今後はカーワンが「日本人が日本代表を指揮すべきだ」と語るように、日本人HCが必要であると思われる。

日本人HCに必要とされる要素を考えるうえで、過去、日本人監督として、最も長い期間在任した大西鐵之祐の方法は、多くを教えてくれる。彼は「カンペイ」などの独自の戦術を駆使し、日本代表を強化した。大西の方法には、これからの日本人HCが考えるべきことのヒントが数多く隠されている。

第4章 協会の協力・体制の強化

ラグビー強化のための施策を具体化・実行するためには、なによりも協会の協力、支援が不可欠である。日本代表の母体となる存在は、「日本ラグビー協会」である。日本ラグビー協会の全面的なバックアップがなければ、選手個人の強化もHC候補の人材育成も実現しない。そこで本章では、日本ラグビー協会の持つ問題点とその改善策について検討した。

その結果、監督の在任期間を1～2年程度から5年以上と長くし、それによって長期的展望に立った強化策を可能にすることが必要であることが明らかになった。

また、海外の強豪国のように、日本もトップ選手のあいだに独自の統一的なラグビー・スタイルを確立する努力が必要であることが明らかとなった。

結論

日本代表が世界の強豪国と互角に渡り合える力を身に付け、今後のW杯において決勝トーナメントに進出するには、長期に渡り継続的かつ計画的な強化が必要であることが絶対に必要である。W杯で勝利しなくては、日本のラグビー人気回復は有り得ない。W杯で勝つことは、「日本代表が強くなった」と認知されるだけでなく、ラグビー人気回復に直接リンクするのである。